

樂園の再興

いま、私は寒い役所の事務机の上に、一冊の本をひるげ
て、いい知れぬ感じにうたれて、呆然としてゐる。表紙には
冬の野原を六、七才の子供たちが世にも楽しそうに一かたま
りになつてかけよつてくる所を、低い位置からスナップして
あり、その下にやや大きい活字で「學校におけるよき出發」
“A Good Start in School”の題名がある。米國インディ
アナ州の公立教育部發行の第一五八冊と小さくしてある
文字が、畫面の空に浮いてゐる。全部上質のアートペーパー
で、子供たちのあまりにもたのしそうな姿態や、壺のさまざ
まな有様の寫眞がいつぱいのついで、日本なら六號活字位
な大きさの細かな文字で記事がつまつてゐる。私は繪をなが
めたり、あちこち拾ひ讀みして見る。繪を見るだけでもいい
ですよ」といつて、ヘフファン女史が貸して下さつた百八十
頁の本に私はたましいをうばわれたような氣持で呆然として
ゐる所なのである。

これは幼児たちに「學校におけるよき出發」を興えるため
の先生方の御苦勞を助けるために委員會をつくつて編まれた
ものであるとのことで、五才の幼稚園と六才の第一學年、七

文部省學校教育
局青少年課長

坂元彦太郎

八才の二、三年を一體とした四年間の學校生活の入門が取扱
われている。この書は一九四四年の八月に第一版が出ている
から昭和十八年に當り、戰爭の眞最中である。この書の編ま
んに特に盡力したという三人の人の「教師ならびに行政官へ
の公開狀」が卷頭につつてゐるのを次に抄譯して見よう。

「この國家的危機の時にあつて幼い子供たちを教育してい
る我々は、いま當面してゐる戦いにはなく、來るべき平和
に目を注ぐ嚴かな義務を負つてゐる。我々の責務は破壊が荒
れ狂つてゐる世界での數少ない眞に建設的なものの一であ
る。我々が今教育してゐる子供たちは、その心身や生活を發
達させて、いま諸國家がそのために戦つてゐる、平和安寧自
由の世界を建設することに參加することが要求されてゐるの
である。」

子供の要求というものは戰爭のときであろうとそう變るも
のではなく、戰爭はかえつて、世界を戰爭につきおとすこと
を獨裁者に許した歐洲の教育の一形式についての反省をもた
らした。我々の課題は、永久に自由でありつづけることの出
來るように、自由な人間として必要な教育をわれらの子供達

に施すにある。」大學ではペンを棄てて戰場に馳せ参じたが「同じ壓力が小學校にもたらされねばならないと考えた人は少なかつた。」「年長のものは、その正常の關心や趣味や活動をししばらく棄てることも出来よう。しかし、小さな子供についてはこちらが。彼はこの子供の時期をたつた一ぺんしか持たない。若しも彼から、安全や幸福、正當の活動や經驗を今うばつたなら、彼に後になつてそのつぐないをしてやることは出来ないのである。……青年を上官の命令に服従するように訓練することは數週間で出来る。しかし、子供を考へるように、考へて行動するように教育するには、長年月の注意深い教育と健全な指導とが必要である。考へるといふことは、すべて必要な事實が集められ調べられ解決され評價されないうちは判断を留保する、といふことを含んでいる。それは教養のある感情と、個人的な好き嫌ひにかかわらず眞理と正義を主張する意志を含んでいる。」「われわれが願つてゐる世界はこのような考へなくては建設され得ない。我々の世代ではこうした世界を建設することは出来ない。われわれはただそのいとぐちを開くことが出来るだけである。子供たちがはじめてほんとうの平和な世界をうち建てることが出来るのだ。」「勞働者と軍隊が戦争を勝ち取る、教師と父母がその子供を通じて平和を勝ち取る。」の語で二頁の文章が結んである。

私は、この文章を読み、本文をばらばらとめくりながら、いい知れぬ感じに打たれて、實を打ち明ければ、涙がまぶた

にあふれかけている。この個人的な感傷を分析してさらに數枚の悪文を重ねたいと思う。

今、引用した序文の内容の一句一句に、戦争中に日本の子供に對しておこなわれたあらゆるらしい犯行が、きびしく責められてゐる。このことをえぐり出すことはお互にあまりに切なすぎる。讀者はここでもう一ぺん前の引用を読みかえして頂ければ、おそらく、私と共通な悔いと、嘆きと、そして一方には、子供たちに對する強いはげしい愛情のきびしさを感じみじみ感得されることであろう。今や、私たちも、皆さんと共に聲をそろえて云おう、子供たちには子供としての生活や喜びはたつた今にしかないのだ、世が混亂と貧乏のどん底にあろうとも、子供の世界にはかわりのないことで、子供は子供らしく、明るく楽しい豊かな生活をおくらせようではないか、と。

混亂も貧乏も、子供の世界には何のかわりもない——とは、あまりにも突飛な言説であると云うかも知れないが、無論、暗々のうちにまわりの世界から影響を受けることは己むを得ないとしても、何人が好んで幼児たちに闇の商賣の任方を教え、ペテンとインチキを授け、世の苦しみの實情をあはく必要があるらうぞ。能うかぎり、可能な限りの、あたたい環境をしつらえて、幼児に出来るだけ平常の生活を送らせるように努力すること、これが両親のつとめであると共に、幼児の保育にあたる者の心がくべきことである。戦争ごつこしか遊びをやらせなかつたあの戦争中の子供に對する犯行を、

別の姿で持續する必要はさらさない。せめて、こどもたちだけでも、資材や設備はとほしくとも、いろいろな工夫でもつてこのかけがえのない幼児期を充實しておくよう、世話と教育とを興えようではないか。

この國家的破滅の淵にひんしている時にあたつて、幼い子供たちを教育している我々は、この當面している混亂に目を注ぐべきではなく、來るべき平安と文化とに目を注ぐ嚴かな義務を負つている——といった風に、この文章を少しづつ書きかえていけば、正しく、いまの我が國のことである。さらに、かの歐洲の獨裁者を産んだ教育こそは、悲しいかな、今までの畫一的な強制的な教育、押しつけと詰め込みの教育と共通のものであることを認めねばならない。ほんとうに、子供たちを伸び伸びと明るく育て、自分の頭で考え、自分の力で行うような人間に育てていくこと、子供の子供らしい自然の生長に添つて、その後を辛抱づよくついでていくといった、骨折の多いまわり道をとることによつてのみ、ほんとうに、權力にも、集團の壓力にも動かされず、自由な批判と行動をすることの出來る個性をつくる源となるであらう。この基は、幼児の時に築かずして、いつの日かそのつぐないが出來ることであらう。

この書は、戦争のはげしい時に出版されるのだから、いかに仕上げられないのが残念である——とも書いてある。しかし、どうして、どうして、とても立派なものである。あ

る日本有数の印刷會社の重役が、日本の印刷技術は世界で一番進んでいる、今はただ資材がないからうまくいかないのだ、と或る席上で述べたのを聞いた。丁度、私はたずさえていたこの書をだまつて、その人の前にさしだして、これが戦時中の印刷ですよ、とのみを、熱心に頁をめくつていて彼に語つた。「とても、かなわない。」これが、彼の答えであつた。もつとも、手許からはなさず持ち歩いたために、すまないことには表紙が本文とはなれてしまつたが、こののり付けの不充分などが、唯一の戦時色かも知れない。本文にも、さし繪にも、ほんの少しの戦時色がないということも、あの頃の日本人には想像も付かないことである。——

私は、大分前からつと一つの夢をひそかに持ちつつづけてきた。それは、幼稚園と小學校の三年とを一つにした、いわば兒童前期のための教育機關をつくることである。これほど楽しく、そして生きがいのある仕事はなからう、と私は夢想していたのであつた。私は、この書のように、すでにこれが現實の姿として現はれて、かくも美しく巧みにえがき出されてゐるのに接して、いまさら、何をいうべきか、ことばを知らない。うらやみ、ねたみが、實は頭をもたげているのを告白しないわけにはいかないが、この方向に歩むことの可能を豫示されたうれしさで、胸が一ぱいになり、まぶたがあつくなるのである。功刀よし子さんの恩師たちがこの書の編さんに當られたことを聞いて、功刀さんとこの書についての感

激を語りあつたが、その時、私の涙もろさを明るくからかわれた。笑われながら、私は一層あかるい涙が胸の中にひろがるのを覺えたことである。

私は、一ぺんで読みおわるのが惜しいような氣持ちで、一方 仕事の繁忙にもかまけてまだ、讀み終るまでにはいたらない。讀みおわらないことが、何となく楽しい豫感を私に貯えていく。

陶淵明の詩をもじつて「學園まさに燕さんとす、何ぞかえらざる」との感慨が冷たい役所の事務テーブルの上にさまよう。幼稚園を學校教育法の中に入れることの數々の苦勞も、子供たちの一回の微笑ほどのぬうちもたないような氣がして來た。いつかは、日本にもこうした四年の初級の學校が出來、その子供たちの楽しいサークルの中に立つ自分を見出す日が來ることを期待ある夢にうつとりとなるしばらくの時を持つ。

私が夢みて來たこの四ヶ年の初級學校は、つまりは、本當に自律的な社會人をつくるための土臺を築く最も重要な時期に對する最緊要な教育を行う所である。もつとほんとのこととを打ち明ければ、私は、この時期の子供たちとおそぶことほどたのしく、先生としての生きがいと人生の幸福を感じることはない、との個人的な趣味、限らない愛着を持つてゐるのである。その上に、私は信じてゐる、この時期の子供の教育を經驗しつゝその方法と態度とを會得してはじめて、それ以外の子女の教育も出來るようになるのである——。正直にい

えば、この初級學校こそ、もしも樂園というものがこの世にあるとすれば、正しくそのものである。ああ、この天國にも比すべきものが、いままでも日本の國ではおろそかにされ、おとろえ亡びようとして來た。幼稚園から小學校の下級までの教育をたてなおすこと、そしてその方法と態度を上の方にまで押し及ぼすことが、新教育の精神でもあるが、この樂園建設を復興し、建設しようとする人々が一人でもふえることを切に祈りたい。

さらに、私事にわたり、手前味噌になつて恐縮であるが、私は數年前岡山師範の女子部長をしてゐた。その時學校中で一番立派な所は附屬幼稚園であり、そこはほんとに楽しい夢のやうな桃源境であり、樂園であつた。私は幼稚園と國民學校の一貫した教育の經費を先生方と計辨し、少しは實施をして見た經驗をもつたが、遂に、一昨年六月末悪夢のやうな一夜、一切が灰になつてしまつたのであつた。また、絶えず協力してくれた小山主事も、廣島で死んだ十萬人の一人となつた。今一ついわしてもらいたいことはその夜の前日まで、いろいろな壓迫や國難にもかゝらず、幼稚園を開きつづけたのだ。その時まで一緒に働いた吉岡、横田の先生方の努力を思いおこし、このささやかな私たちの努力がさらにあの「桃源境」が、灰となつて天に舞い上つて、この冊子の中に現はれ、新生の幼稚園の中に、さらにも來るべき私の夢の初級學校の中に、實現するであらう、という予感が、私の胸一ぱいを涙でひたすのである。

(昭和十二年三月七日)